

主人公は、自分の知っているルロイ修道士とは異なる言動に、実は病を抱えているのではないかと疑う。遠回しに聞いてみたりもするが、それを悟られないようにルロイ修道士もすぐに話題を変える。心の隅にあつた疑いも、二度と会えないという意味でのお別れなのではないかという気持ちとともに大きくなり、ルロイ修道士を心配させるのだった。

主人公は、いつもと違うルロイ先生に疑問を持っていて、何度も聞こうとしたが、はぐらかされて、もどかしい気持ちになっていった。けれど、「ルロイの言葉を忘れないでください」という言葉を聞いて、ルロイ先生はこの世のいとまごいに園児たちと会っていて、もうすぐ死ぬかも知れないと疑った。いや、ほぼ確信した。

しかし、ルロイ先生は、隠そうとしているので、これは聞かない方がいいのか、いやはや聞いた上で、そのつもりで見送ったらしいのかと、とてつもなく迷っている。ルロイ先生のことをたくさん思っている。

主人公は、ルロイ修道士が病にかかっているのではないかと思わせないようにしていることから、修道士の病を疑っている。しかし、修道士はそれを隠そうとしているのだから、無理に聞いて悟られないようにすることが保っていたものを壊してしまって、病が悪化しては元も子もない。修道士は、かつての園児たちをこの世のいとまごいに尋ねているが、それによって病を悟らせ心配させたくないと思っている。主人公は、修道士の病を疑ってはいるが、本人が隠そうとしているのだから、無理に聞くことはないと思ひ、心で思ったことを口に出さないようにしている。

主人公は、ルロイ修道士が一口もオムレツを食べなかったり、自分がルロイ修道士の体のことを言うとかんわりとかわたりする様子を見て、「この人は今、病人なのではないか」と疑っている。きちんと聞きたいが、ルロイ修道士が悟られないようにしているので、聞いても「心配いりませんよ」と言っつて、答えてくれないのではないかと思っつている。でも、自分は知りたいと思っつている。ルロイ修道士の思いを尊重すべきかどうか、迷っつている。

主人公は、ルロイ修道士に食欲がなく、指先が震え、病人のような握手をし、遺言のようなことを言っつている四つの暗示からも、かなり高い確率でルロイ修道士は病気であることを疑っつている。しかし、主人公は、それを聞くべきか聞かざるべきかでとても迷ひ、戸惑ひ、悩んでいひる。ルロイ修道士の意思を尊重すべきか、けじめをつけるためにも聞くべきかという2つの選択肢の間で揺れ動いひるのだらう。

しかし、ボクの意見としては、聞かない方が良ひと思ひう。聞いてしまひうと、ルロイ修道士が悟られまひいと必死に画策したことが台無しになっつてしまひうからである。今後、主人公がどのような判断をするのか、楽しみである。

